

ハインリヒ・ハイネと1848年

高 池 久 隆

岡山理科大学理学部

(1996年10月7日 受理)

I

1848年という歴史上の節目の年は、同時代の多くの詩人・作家にもまた計り知れない影響を及ぼした。中でもとりわけハイネ (Heinrich Heine) の場合、この年は重要な意味を持っていたように思われる。1848年は、言うまでもなく二月革命の年である。1789年に始まる大革命と1830年の七月革命がハイネの生きる方向を決定づける大きな出来事であったことは確かであるが、前者はハイネが生まれる前のことであり、後者もハイネがフランスへ渡る前のことであって、いずれもハイネ自身によって直接体験されたものではない。それに対して、1848年の二月革命は、まさに初めて直接体験された革命なのである。このことによってハイネの革命観に変化が生じたのか否かは大きな問題である。さらに、それにとどまらず後年ハイネは、1848年に健康、経済、宗教上の大きな変化があったことに言及している。すなわち、1854年の『告白』(Geständnisse)においては、1848年2月に、神を気取るために不可欠な二つのもの、つまり、「たくさんのお金とたくさんの健康」(DHA, XV, 36)を失ったことを、また1851年の『ロマンツェーロ』(Romanzero)後記では、1848年5月にルーヴルのミロのヴィーナスの前で異教の神々との別れを行なったことを述べている¹⁾。自らの様々な変化をこのように1848年に突然訪れたものであるかの如く述べるハイネの言葉は、厳密に言えば必ずしも正しくない。これまでの研究によれば²⁾、1820年代以降ハイネは断続的に病気に悩まされており、最終的に「褥の墓穴」(Matratzengruft)に至る病気も1848年の数年前から徐々に進行していったものと思われる。また株による損失やフランス政府からの年金停止などのマイナスは、従弟からの援助や出版社との新たな契約などによるプラスによって相殺されたとのことである。また汎神論から人格神信仰への転向も、1848年に急激に行なわれたものではない。とはいえ、それまでに潜在的に抱えていた問題の数々が、1848年という激動の年に顕在化してきたことは疑いようもないのである。主に1848年に書かれた文章・手紙、さらに同時代人の証言などを手がかりとして、この当時のハイネのうちで進行していた変化などについて探ることが本稿の課題である。

II

まずハイネの病気に関する部分に目を向けることにするが、ハイネ自身の言葉を聞く前

に、ハイネと交流のあった同時代人の証言に耳を傾けたい。

1848年1月エンゲルス (Friedrich Engels) は、ハイネを訪問したときの様子をマルクス (Karl Marx) 宛の手紙の中で報告している。

ハイネは死にかけです。2週間前に彼を訪ねましたが、その時ベッドに横たわり、神経性の発作を起こしていました。昨日は起きていましたが、きわめて悲惨な状態でした。もう歩けません。肘掛け椅子からベッドまで、その逆の場合もまた、壁をつたいながらノロノロ歩くのです。(BmH, 99)

また、カロリーヌ・ジョベール (Caroline Jaubert) は後年の回想の中で、1月初旬にハイネが彼女を訪ねたときのことに触れているが、三階の住居まで辿り着くのに従者に背負われねばならなかったこと、全身の痙攣を目撃したことを伝えている³⁾。3月にハイネの訪問を受けたファニー・レーヴァルト (Fanny Lewald) は、その時のハイネの様子について、「従者に外套を脱がせてもらっている間、誰かに手を貸してもらわねばならなかった」(BmH, 111)と語っている。以上のような証言は、この年の初めにおいてすでに病気がかなり進行していたことを示しているが、同時にまた、従者の手を借りればまだ外出も可能であったことを示している。ところが、10月にハイネを見舞った作曲家ジャコモ・マイアーベアー (Giacomo Meyerbeer) は或る手紙の中で、「詩人ハイネはひどい状態だ。全身がすっかり麻痺していて、もはや動くこともできず、その上さらに、これ以上ないほど恐ろしい痙攣にも耐えねばならない」(BmH, 117)と述べて、病状が春よりも相当に悪化しているらしいことを証言している。『ロマンツェーロ』後記におけるハイネ自身の言葉によれば、1848年5月にルーヴルへ出かけたのがハイネにとっての生涯最後の外出であったとのことである。マイアーベアーの証言は、いわゆる「褥の墓穴」の境遇にあるハイネの様子を伝えるものなのである。

この時期のハイネの手紙を読むとき、自らの病状についての夥しい記述に出会うが、誰に宛てての手紙であるかによってその内容に微妙な違いが見られる。

特に目につくのは、母親に対する気配り、配慮である。かつて (1843年)、『夜の想い』 (*Nachtgedanken*) と題する詩の中でハイネは次のように歌った。

憧れと望みはつのも
老いた母が私をとりこにする
いつも彼女のことが思われる
神よ母を守りたまえ (DHA, II, 129)

そのハイネは母親に、自分が重病に冒されていることを知られないように努めている。エンゲルスやジョベールの証言でもわかる通り、病状が相当悪化している1月の母親宛手紙でハイネは、「ぼくはいつもより元気です。ずっとずっと元気です」(HSA, XXII, 268)と

伝え、母を安心させようとする。また4月の出版社主カンペ (Julius Campe) 宛の手紙の中では、病状について詳しく述べながら、この病状がカンペの口から母親に漏れることのないよう依頼する。

私の絶望的な状態を母に隠そうと、言うに言えない努力を払ってきました。くれぐれも秘密厳守をお願いします。[.....]妹にも何も知らせてはいけません。彼女のことも常にうまく欺ってきました。(HSA, XXII, 272)

その一方でハイネは、目の病気にすぎないと思込ませている母親を、病気を持ち出すことによって逆に安心させようとしさえる。

[.....] 万一ぼくが元気いっぱい日々の闘争の中へ身を投じることができたなら、死の危険にさらされていたところでしょうが、まさに病気のお陰で今恐らくぼくはそのような危険から守られているのです。(HSA, XXII, 276f.)

しかし母にも妹にも内緒にしたいとのハイネの思いは、軌道修正を余儀なくされる。すなわち、内緒にしたままでハイネが死ぬようなことがあれば、自分が非難されると心配した妻マティルデ (Mathilde) の、せめて妹だけには知らせておいて欲しいとの意向に沿って、妹にだけは知らせ、母には伏せることになったのである。

仕事上の手紙では、カンペ宛の手紙が特に多い。病状についての記述はかなり詳しいが、そこには、遅々として進まぬ新全集の計画についてカンペの決断を促すためという戦略的な意味合いも若干あるように思われる。カンペからの返事の遅延に対して、「もし私が死んだら、貴方はきっと返事の遅れを後悔しますよ」(HSA, XXII, 286f.)と半ば脅しをかけている。また、「私は貧しい、死にかけの男です。あらゆる点で貧しいのです。私の病気に必要なものや経費を賄うだけの持ち合わせがほとんどありません」(HSA, XXII, 279), あるいは、「貴方には私の病気がどれだけ費用のかさむものかわからないのです」(HSA, XXII, 305) と、病気に伴う経済的困難に触れることも忘れない。

6月、妹に詳しい病状を知らせることにして以来、ハイネは肉親に対する手紙で自らの情を隠さず吐露することができるようになったのである。8月の妹シャルロッテ (Charlotte Embden) 宛の手紙では、自らの病状を巡っての揺れる心が、何度も繰り返される逆接の接続詞の使用によって示されているように思われる。

健康状態は決して良くなっていない。だが危険はない。それにつけても悲しいのは、ぼくが生き続けているという、まさにそのことだ。だから、ぼくのことを心配する必要はない。でも、ぼくはこの上なく同情に値する。[.....]ぼくは哀れな麻痺患者になってしまったから、もしそちらへ行ったりしたら大変な厄介をかけることだろう。それでも来年には、そちらへ行きたいと思っている [.....] (HSA, XXII, 288)

弟マクシミリアン (Maximilian) 宛の手紙においては、この弟が医者であることから、事細かな症状の報告がなされ、専門的見地からの助言が期待されているが、それだけではなく、内面の苦しみが率直に表わされている。

この生きながらの死、この不生は、これに更に痛みが加わったなら耐えきれない。[.....]
たとえ今すぐ死ぬのではないにしろ、生はぼくにとって永遠に失われている。それでもぼくは生を熱烈な情熱をかたむけて愛している。(HSA, XXII, 294)

さらに、耐え難い病気であるにもかかわらず、自ら命を絶つことをしない理由を次のように説明する。

この苦しみにけりをつけなかったのは、ただただ妻のためだった。再び生を楽しめる希望も全て消え、さらにその上心がいくつもの不治の傷を長く患っている男になら、恐らくそれも許されるのであろうけれども。(HSA, XXII, 301)

以上のように、この時期のハイネの病状が相当に進み、ハイネが死と隣り合わせにいる自己というものを強く意識していたことが窺える。

III

次に経済面の問題に移ると、すでに上でも触れたとおり、病気に関わる費用はハイネの悩みの種であった。妹宛の手紙では、心配をかけないために、「病気にかかる多額の費用を支払うお金は全然不足していない」(HSA, XXII, 282) と言っているものの、カンペ宛の手紙では、「私の病気は黄金を食らう獣です。血を吸うだけではありません」(HSA, XXII, 280) と言い、また弟宛の手紙でも「お金は良いベッドのようなものだ。今ぼくが寝ているベッドみたいな悪いベッドだと苦しみを増すことになるが、それに引きかえ、良いベッドというのは、勿論脊椎の痛みを癒すことはないにせよ、増すことはない」(HSA, XXII, 292) と、金の効用について述べるのである。この時期のハイネが金の必要性を強く意識していた原因としては、直接の医療費の問題もさることながら、自分が死んだ後の妻の行く末を慮る気持ちも大きかったと思われる。

しかし、この時期の経済面に絡む最大の問題は、ギゾー (François Guizot) 政府から受けていた年金に関することであろう。生活のための職業を持ちつつ、その傍ら執筆するという作家とは異なり、基本的に自らの執筆活動によって生きていくことを選んだ、あるいは余儀なくされた詩人にとって、異郷の地で妻とともに暮らしていくためには、ありとあらゆる手段をもって金策に努めることが必要であったろう。その一つがこの年金であり、これが革命の結果停止されてしまったことは、それ自体ハイネにとって大きな痛手であったと思われる。とはいえ、単なる収入上のマイナスであれば、他の収入源をさがすことにより埋め合わせることが可能であり、事実ハイネはそのための方途をさぐって行動してい

た。しかしながら、ハイネにとって遙かに大きな痛手であったのは、革命後に公表された年金受給者リストにハイネの名があったことである。従来から親仏的と見られがちであったハイネの発言が、単にパリに住むハイネの一種の遠慮から出たものではなく、いわばフランス政府に買収されてのものであった、との大きな疑念を引き起こしてしまったのである。これは勿論ハイネにとって座視し得ぬ事柄であり、この事の影響の大きさを意識したハイネは、5月になって『声明』(Erklärung)を發表し、自分とギゾー内閣との関係についての誤解を解こうとする。

ギゾー氏はしかし頑強に私の追放を拒み、毎月年金を私に支払ってくれました。定期的に、中断なく。その代償として私にほんのわずかでも奉仕を求めることは決してありませんでした。彼が外務大臣の職に就いた直後、私は表敬訪問をし、自分の過激なカラーにもかかわらず年金の継続を通告してくれたことに礼を言ったのですが、その時彼は、憂鬱げながら好意を持って答えました。「私は流謫の暮らしをするドイツの詩人に対して一片のパンを拒めるような人間ではありません。」この言葉をギゾー氏が私に言ったのは1840年11月のことであり、一生のうちで彼と直接会って話す光栄に浴したの、これが最初にして同時に最後でした。(HSA, XXII, 275f.)

ギゾーの意志、ハイネの意志がどうであれ、疑念を払拭することは望むべくもないと思われる。自由な文筆家としてのハイネの名譽を著しく損なう出来事であったことは間違いない。

IV

続いて、ハイネの目に二月革命はどのように映じていたのかを見ていきたい。ハイネは、1830年の七月革命が不十分なものであったことを常々感じており、来るべき革命に大きな期待をかけていた。たとえば、1840年の『ルートヴィヒ・ベルネ回想録』(Ludwig Börne. Eine Denkschrift)において次のように述べている。

大昔から民衆が血を流し苦しんだのは、自分たち自身のためではなく、そう自分たち自身のためではなくて他人のためであった。1830年7月に民衆が勝利を勝ち取ったのは、貴族同様の役立たずであるブルジョアジーのためであった。ブルジョアジーが、同じエゴイズムをもって貴族に取って替わったのだ。．．．民衆が自らの勝利によって獲たのは後悔と更にひどくなった困窮のみであった。だが信ずるがいい。もし再び警鐘が打ち鳴らされ、民衆が銃をとるようになれば、今度こそ民衆は自分たち自身のために戦い、受けてしかるべき報酬を要求するということを。(DHA, XI, 56)

すなわちハイネは、二月革命の以前から、いわば予言者として革命の勃発を予言し、期待してもいた。そして、目の前で起こる革命について、それを予言した者として報告する立

場に身を置くことになったのである。

革命直後の3月にハイネは、アウクスブルク『一般新聞』(*Allgemeine Zeitung*)のための通信文の原稿を4回に分けて書いている。結果として、『一般新聞』に掲載されたのは一回目分の原稿だけであり、あとの三回分は、ハイネ自身の言葉によれば、「出来事に凌駕されて最早価値のない」(HSA, XXII, 274)ものとなったため、原稿のまま残されることになった。この通信文は、「出来事の記録を提供するものではなく、距離を置かずに二月革命の様々な様相を扱う⁴⁾」ものである。その中では、ハイネが革命をどのような位置から目撃したのかについて次のように語られている。

私はこの革命という芝居を良い席で見ることができた。いわば最前列の特等仕切り席で見た。というのも、たまたま居合わせた通りが両側からバリケードで仕切られてしまったからである。(DHA, XIV, 287f.)

その当時療養所にいたハイネは、自宅に寄った後療養所への帰途市街戦に巻き込まれ、自分の乗っていた車もバリケードに使われてしまった。このようにしてハイネは、今回初めて革命の現場を体験することになったのである。

第一報(3月3日付)におけるハイネの評価は以下の通りである。

偉大な作家は繰り返しを行なっているのか。彼の想像力は尽きてしまったのか。この2月に彼が見せてくれた芝居なら、既に18年前同じパリで七月革命というタイトルのもと上演していたのではなかったか。とはいえ、良い芝居は二度観ることもできる。ともかく改訂・増補がほどこされている。とりわけ結末は新しく、盛んな拍手喝采に迎えられた。(DHA, XIV, 287)

すなわちハイネは、二月革命を七月革命の改訂・増補版による再演と見做している。また、この少しあとの箇所では、革命の中心となって活動する民衆の正直さ、私心の無さを称えている。さらに第四報(3月22日付)では、革命勃発後3日目に発足した、ラマルティエヌ(Alphonse de Lamartine)氏を首班とする臨時政府について次のように述べる。

臨時政府という選択は、いずれにせよ偶然のなせる業であった。しかし、フランスの幸福のために、この選択は非常に良かった。民衆、この偉大な孤児が今度籤壺から引いたのは非常に良い番号だった。当たり籤ばかりだ。勇敢で才能のある人々からなる何と素晴らしい連合だろう。全員が世界市民的人間愛に燃えている。(DHA, XIV, 292 f.)

このあと同質性の欠如についての言及もあるが、臨時政府に対して基本的には高い評価を与えている⁵⁾。以上のように『一般新聞』向け通信文でのハイネは、種々の問題点を感じながらも、この革命に対して概ね肯定的な立場を表明していると言ってよいだろう。

3月30日付の通信文用原稿の後、ハイネの革命に対する言及は、手紙におけるものが中心となる。概して言えば、手紙におけるハイネは、革命に対する個人的感情をより直接的に表明していると言える。3月30日付の母親宛の手紙では、「この大騒ぎのために、ぼくは肉体的にも、精神的にも大層弱ってしまいました。ぼくの落ち込みようはこれまでなかったほどです」(HSA, XXII, 270)と語り、革命がハイネ個人にもたらしたマイナスの影響について言及している。勿論、この手紙は母親宛のものであり、息子が革命に関わっているのではないかと心配する母親を安心させるため、革命との距離をことさらに強調しているであろうことも考慮に入れる必要があるだろう。またマイスナー (Alfred Meissner) 宛の手紙では、革命後の共和主義的体制に対する距離が示されている。

目の前で起こった急激な変化に接して私がどんな気持でいるかを、貴方は容易に想像できるでしょう。ご存知のように私は共和主義者ではありませんでした。そして私がまだ共和主義者になっていないからといって驚かれることもないでしょう。今世間で行なわれ、期待されていることは、私の心にとっては全く縁遠いものです。私は運命の前に屈服します。というのも、それに立ち向かうには私は弱すぎるからです[.....]
(HSA, XXII, 271)

またカンペ宛の4月の手紙では、『旅の絵』(Reisebilder)第一部と『サロン』(Der Salon)第一部の新版を出す計画に関連して、「私は決して自分の信念を変えたことはありませんので、二月革命以降でも私の本のうちのどの箇所も変える必要はありません」(HSA, XXII, 272)と述べ、革命に対する基本的姿勢の不変を表明する一方、同じカンペ宛の7月の手紙では、「時事的な出来事については何も言いません。それは、あまねく行き渡る無秩序、世界のごちゃごちゃ状態、目に見えるようになった神の狂気です」(HSA, XXII, 287)と述べ、革命によってもたらされた現実に対する違和感を示している。

このように、二月革命後しばらくのハイネは、革命を予言してきた者として、これまでの自らの主張の現実化あるいは論理の必然としての革命に対して一定の評価を与えつつ、しかしその一方で、現実の革命がもたらす混乱・混沌への疑念をも、とくに私信において、隠さない。すなわち、ハイネにとって革命は「ヤヌスの性格⁶⁾」を持っているのである。勿論これは、二月革命を契機として突如ハイネのうちに芽生えた革命観というわけではない。『旅の絵』の頃からすでにハイネは「一面的、単線的ではなく、矛盾を含む進歩概念⁷⁾」を主張していたのである。そしてそれが、二月革命をごく身近で体験することによって、さらに明確に意識されるようになったと言うべきであろう。さらには、「論理の必然」をめぐるの、ハイネの揺らぎも一層明瞭となってくる。『一般新聞』向け第四報の、以下のような言葉はそれを端的に物語っている。

この世の問題は本当に一つの理性的な思考、思考する理性によって舵取りされている

のであろうか。それとも、それを支配しているのは笑う浮浪児、つまり、偶然という神にすぎないのであろうか。(DHA, XIV, 292)

レーヴァルトの証言によれば、ある時ハイネは、極度に健康状態が悪化したこの時期ではなく、もっと前かもっと後に革命が起こっていれば、との発言をしたとのことである⁸⁾。革命をごく身近で体験し、またドイツでの三月革命の推移にも大きな関心を寄せていたハイネであった⁹⁾が、革命の現実への違和感からだけではなく、病状の悪化という肉体的制約の故に、革命との十分な関わりを持ちがたい状況にあったというのが当時のハイネの置かれていた状況であった。

V

既に上でも触れた通り、ハイネの創作活動はこの年停滞を余儀なくされる。その第一の原因が、口述筆記することにすら困難を覚えるという肉体的状況にあったことは言うまでもない。しかし、今一つ大きな原因を探るとすれば、それは革命を契機とする時代の大きな変化に直面した詩人の困難であったと思われる。妹宛の手紙では、パリの惨状に触れた後、「とりわけ芸術家、ましてや詩人となれば今や餓死せざるをえない」(HSA, XXII, 290)と述べ、芸術、詩に対する世の中の需要が無くなる不安を率直に語っている。

またハイネは『一般新聞』向け第三報で、新しい時代における芸術家の運命について、半ば冗談めかして次のように説明している。

美しく書かれたものの支配は、他の多くのものと同様に終わりを告げる。ドイツの文章術も解放される。いずれにせよ、もはや術ではなくなるだろう。[.....] 共和国では、いかなる市民も他の人よりうまく書く必要が無い。出版の自由のみならず、文体の平等も、真に民主主義的な政府によって布告されねばならない。(DHA, XIV, 291)

他人よりも書く才能に恵まれている点にこそ存在の基盤を持つ詩人にとっての不安がここにはある。

しかしハイネの不安はこれだけにとどまらない。ハイネはレーヴァルトとの会話の中で次のようなことを述べたそうである。

[.....] ああ、もう書けない、書けないよ。だって検閲がないのだから。いつも検閲のもとで暮らしてきた人間に、検閲無しでどう書けというんだ。[.....] これまでは馬鹿なことを書いても、思ったものだ。さあ、検閲が削るか、変えるかしてくれるだろう、と [.....] (BmH, 108)

そしてさらには、検閲制度の継続を希望しさえするのである。勿論この言葉は、長きにわたって闘ってきた検閲制度の廃止に直面してのハイネの喜びの裏返しとも捉えうるが、検

関との闘いのなかで苦心して自らの独特の文体を築き上げてきたハイネが、これまでに積み上げてきたもの全ての崩壊について不安を感じたこともまた事実であろう。

以上の通り、1848年はハイネにとって幾多の肉体的、精神的困難、生存と創作上の危機に見舞われた重要な年であった。この経験がその後の創作活動にいかなる影響を及ぼしたのかという問題については改めて論じることにはしたい。

テキスト

ハイネの著作の底本としては下記のものを用い、DHA と略記する。

Heinrich Heine : *Sämtliche Werke*. Düsseldorf Ausgabe. Hrsg. von Manfred Windfuhr. Hamburg 1973ff.

ハイネの手紙の底本としては下記のものを用い、HSA と略記する。

Heinrich Heine : *Werke, Briefwechsel, Lebenszeugnisse*. Säkularausgabe. Hrsg. von den Nationalen Forschungs- und Gedenkstätten der klassischen deutschen Literatur in Weimar und dem Centre National de la Recherche Scientifique in Paris. Berlin und Paris 1970ff.

ハイネについての同時代人の証言集としては下記のものを用い、BmH と略記する。

Michael Werner (Hrsg.) : *Begegnungen mit Heine. Berichte der Zeitgenossen. 1847-1856*. Hamburg 1973.

なお引用の際は本文中にそれぞれ、(DHA, XIV, 100), (HSA, XXII, 100), (BmH, 100) のように付記した。

註

- 1) Vgl. DHA, III, S. 181.
- 2) Vgl. DHA, XV, S. 510f. ; Henner Montanus : *Der kranke Heine*. Stuttgart/Weimar 1995, S. 490.
- 3) Vgl. BmH, S. 99.
- 4) Gerhard Höhn : *Heine-Handbuch. Zeit, Person, Werk*. Stuttgart 1987, S. 377.
- 5) 5, 6年後の、いわゆる『ワーテルロー断章』(*Waterloo Fragment*)では、評価は正反対となる。「この臨時政府という名前が既に自らの弱気を公式に表明していた。そして信頼を寄せてくれている民衆のためにひょっとすれば自分たちに出来たであろう立派なことも全て最初から無効にしてしまっていた。民衆は彼らに最高の権力を与え、彼らを30万人の護衛兵で守ってくれたというのに。民衆、この偉大な孤児は革命の籤壺から、かの臨時政府を構成する人々以上に惨めな空籤を引いたことは一度もなかった。」(DHA, XV, 190)
- 6) Michael Werner : *Heine und die französische Revolution von 1848*. In : Wilhelm Gössmann und Joseph A. Kruse (Hrsg.) : *Der späte Heine. 1848-1856. Literatur-Politik-Religion*. Hamburg 1982, S. 123.
- 7) Höhn : a. a. O., S. 380.
- 8) Vgl. BmH, S. 111.
- 9) Vgl. Walter Grab : *Heine und die deutsche Revolution von 1848*. In : Gössmann und Kruse (Hrsg.) : a. a. O., S. 160.

Heinrich Heine und 1848

Hisataka TAKAIKE

Faculty of Science,

Okayama University of Science,

Ridai-cho 1-1, Okayama 700, Japan

(Received October 7, 1996)

Der Dichter behauptet in seinen letzten Lebensjahren, daß er im Jahre 1848 plötzlich zur gleichen Zeit verschiedene große Veränderungen erlebt habe. Zwar ist diese Behauptung selbst übertrieben, wie die Ergebnisse der bisherigen Forschungen zeigen, aber es ist sicher, daß die bis dahin nicht so auffälligen Probleme in diesem Jahr explizit wurden. Auf alle Fälle hat dieses Jahr, wo er in Hinsicht auf die literarische Tätigkeit nicht so produktiv war, auf seine nachfolgende Tätigkeit einen großen Einfluß ausgeübt.

Die vorliegende Arbeit versucht, seine in diesem Jahr geschriebenen Briefe und Artikel und die Zeugnisse seiner Zeitgenossen zu analysieren und dadurch festzustellen, was sich damals in ihm ereignet hat.